

救急部門に配属された新卒看護師の就職半年後における倫理的問題への対応能力

【目的】

救急看護師には、救急患者の倫理的問題に適切に対応できる能力が求められるが、看護師の倫理的行動修得のプロセスは明らかになっていない。そこで、本研究では、看護師の倫理的行動修得のプロセスを追跡する縦断的研究の第一段階として、救急部門に配属された新卒看護師の就職半年後の倫理的問題への対応能力を明らかにする。

【方法】

対象：救急部門（救急外来、救急病棟、救命救急センター）に配属された新卒看護師とした。

データ収集方法：就職半年後に、倫理行動メモ（半年間で感じた倫理的ジレンマとそれをどのように感じて、どう行動したのか）の記載を依頼した。その内容をもとに、倫理的行動の4要素（倫理的感性、倫理的判断、倫理的動機、倫理的特性）とその影響要因に関する半構造的面接を行い、許可を得て録音した。

分析方法：倫理行動メモと録音データから作成した逐語録を総合し、倫理的行動の4要素を参考に質的記述的に分析した。

倫理的配慮：研究者の所属施設の研究倫理審査委員会および研究協力者の所属施設の責任者の許可を得た。研究協力者に対しては、研究目的と方法および倫理的配慮（自由意思による研究への協力と同意後の撤回の自由、個人情報保護、データ管理方法など）を説明し、書面による同意を得た。

【結果・考察】

新卒看護師9名の協力を得た。そのうち専門学校卒が7名、大学卒が2名であった。

倫理的ジレンマを述べたのは8名で、その内容は、治療や業務を優先し患者の意向に沿った看護ができないこと、患者の安全を理由に行う抑制・余命の短い患者への苦痛を伴う検査の実施・自殺企図患者に対する蘇生術・患者の意思よりも家族の意思が優先されることなどへの疑問であった。しかし、それらがなぜ倫理的に問題であるのかを説明することはできなかった。残りの1名は、倫理的ジレンマを感じたことはなかったと述べた。

倫理的ジレンマを感じた場面では、「先輩に相談しないと不安だ」「判断が違ったときはリーダー看護師の判断が正しいと思う」など、新卒看護師は自分の行動の決定を先輩看護師に委ねていた。また、「家族サイドの体験をしたことがあるので自分に重ね合わせている部分がある」「患者を優先した方が良いことはわかっているが、時間内に業務を終わらせないと先輩に迷惑をかける」など、看護師としての価値観よりもこれまでの生活背景や職場環境から築かれた個人的価値観が先行する新卒看護師もいた。

以上から、就職半年後の新卒看護師は、倫理的感性はあるが、そこに潜む問題についての倫理的判断はできていない。その要因は、倫理的判断に必要な基礎的情報を整理する能力が未熟であり、すべて先輩看護師に報告・相談をしている状況があるためと考える。倫理的動機については、看護師の専門的価値より個人の価値観や感情が優先されており、倫理的特性も未熟であるといえる。